北海道の地域と学校の連携・協働を応援する広報誌

Hokkaido community and school collaboration

地学協働

北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課　2024年12月 No.27

バックナンバーはこちらから御覧いただけます。

1　北海道地学協働アワード2024

「地域との連携・協働体制を構築している学校」の功績を表彰する本アワードに17校の応募がありました。今後は、提出いただいた資料や動画もとに、審査を行います。最終的にグランプリ１校、準グランプリ１校、特別賞３校程度を決定します。各校の発表動画をYouTubeで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

応募校
池田高校、津別高校、根室高校、上川高校、上ノ国高校、夕張高校、帯広三条高校、当別高校、札幌あいの里高等支援学校、函館商業高校、余市紅志高校、南茅部高校、音更高校、真狩高校、羽幌高校、余市養護学校、弟子屈高校（応募順）

YouTube
社会教育課チャンネル

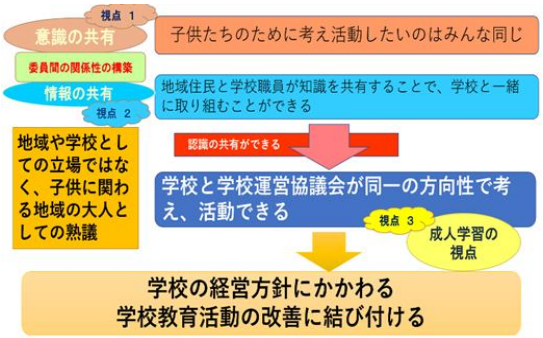
2　【道北ブロック】地域と学校の連携推進協議会 報告書

開催日：令和６年（2024年）11月21日（木）　主　管：オホーツク教育局
開催地：オンライン開催　　参加者：64名

道北ブロックでは、子どもたちの成長を支えている「コミュニティ・スクール」と「地域学校協働活動」の効果的な在り方を理解するとともに、地域と学校が相互に連携・協働する方法等について、今後の方策を検討し、地学協働体制の推進を図ることを目的に、小学校、高等学校及び町の社会教育主事による実践発表や参加者の関心に応じたテーマ別の協議を行いました。

1　実践発表

①「地域の方々の主体性を引き出す協議会の運営方法」
発表者：紋別市立紋別小学校
校長　大岩　芳江　氏



【主な内容】
委員が主体的に参画できる協議会の運営に向けた取組を、３つの視点で整理する。

【視点１】意識の共有（共感できる関係づくり）
子どもを中心に据えた協議により地域住民と学校教員が目標を共有する。共有した目標を見失わないために、学校運営協議会の基本方針を全員で作成する。

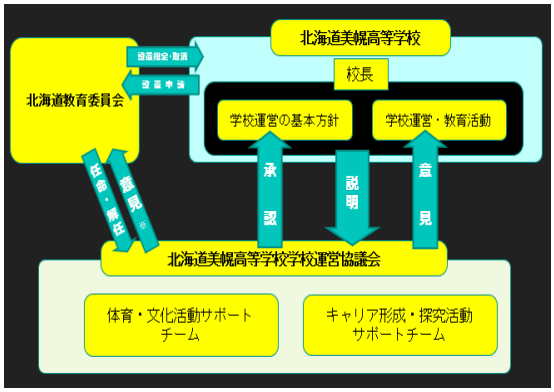
【視点２】情報の共有（協働できる関係づくり）
学校の教育活動の説明と地域の実情を話題にすることで認識を共有し、意見を出しやすい場である熟議を大切にしながら、協働できる関係性を構築する。

【視点３】成人学習の視点（熟議を活性化させる）
CSは大人の学びの場である。委員の興味関心を話題の中心にすることで、主体的に関わってもらえる。そのためには、地域住民が取り上げたいテーマについても時間を区切り実施する。

【取組のポイント】

○　CSにおける「熟議の場」を学校の教育活動の改善につながるものにするためには、「意識の共有」と「情報の共有」を通じて、委員間の信頼関係を構築する必要がある。
○　委員との良好な関係を築くために、成人学習の視点を大切にし、委員が興味をもつ情報を取り扱い語り合う時間を大切にする、校長としての期待を伝えるなど、時間をかけて丁寧に関わる必要がある。

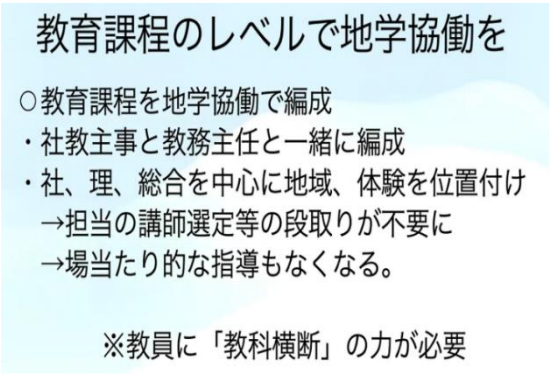
②「ＣＳ導入１年目の地域連携の実際」
発表者：北海道美幌高等学校
教頭　後藤　　洋　氏



【主な内容】
○　美幌高校は、普通科（２間口）と未来農業科（１間口）を併置した町内唯一の高校（生徒176名）である。
　生徒減による間口維持が課題となっており、魅力化に取り組んでいる。
○　部会の構成 ≪ＣＳ委員計15名（**うち学校職員５名**）≫
・**「体育・文化活動サポートチーム」**
　体育連盟、文化連盟、教育後援会長、PTA関係者等
・**「キャリア形成・探究活動サポートチーム」**
　商工会関係者、農業クラブと連携する博物館職員等
○　第２回の学校運営協議会を開催後（町の新年度の対応に間に合う時期）に、CSを活用し、**「部活動の地域移行」「寮・下宿の整備」「コーディネーターの配置」**に向けて、町長・教育長へ中間提言（高校と町で手を組んで、やっていきましょうという趣旨）を実施した。

【取組のポイント】
○　校内委員（教員）と管理職で、CSで扱う課題等を確認し**事前に協議内容を整理**している。その時間にはCS以外のことが話題になることも多く、学校運営にとっても有益な時間となっている。
○　**高校の取組や思いを発信し、地元自治体や住民の理解を得ながら、信頼関係を構築することが重要**である。CSが拠点となって、学校と地域が協働するために互いが当事者意識をもって役割分担ができるとよい。

③「社会教育主事の専門性を生かした
地域学校協働活動のコーディネートと
そのポイント」
発表者：浜頓別町教育委員会生涯教育係
社会教育主事　戸田　弥祥　氏



【主な内容】
○　浜頓別町では、各学校の教育課程の編成に社会教育主事が関わることで、社会に開かれた教育課程の実現を目指している。
○　「いつ」、「誰が」、「何を」、「どこで」学習するのかが一目で分かる「地域学習カレンダー」を作成し、全戸・全企業に配布することで、地域住民の理解促進を図っている。
＜戸田社会教育主事がコーディネートした活動＞
・給食新メニューを開発（小６）
・企業と連携して全粉乳を使うスイーツ開発（中３）
・道内大学と連携した学び
・クッチャロ湖×SUP（小３～中３）
※SUPは、体験活動を通じて地域の魅力を子どもたちに再発見してもらうことを目的に、企画・提案し、小・中学校の総合的な学習の時間に取り入れた。

【取組のポイント】
○　**教育課程（社会、理科、総合的な学習の時間等）に地学協働を位置付ける**ことで、子どもたちに豊かな体験活動を保障し、**地域の教育資源を教材化**することができる。
○　先生方が地域人材や地域資源の活用に困っている場合は、それぞれの市町村で人材のネットワークをもつ社会教育主事等に相談するなど、**学校教育と社会教育が連携できる体制づくり**が望まれる。

２　協議「参加者が抱える課題と今後の取組に向けて」

「『熟議』を活性化させるための工夫とは」、「学校運営協議会での議論を学校運営や学校経営に生かすために」、「地域と学校のコーディネート機能を充実させるために」の３つのテーマに分かれ、協議を行いました。

【協議で出された意見（一部抜粋）】
○　熟議を充実させるために、**自校の課題を包み隠さず話すなどして委員の不信感を取り除くべき**との指摘をもらい参考になった。
○　**一般の教員も無理のない程度に参加していける体制づくり**が大事と感じた。地域とつながることは学級経営をスムーズにすることにもつながると思う。
○　CSを形骸化させないため、充て職などのあるべき論に縛られず、**地域おこしを頑張っている地域の方をアンテナ高く発掘する**必要を感じた。

3 学校運営協議会の事例紹介

11月に、当別町立とうべつ学園（石狩管内）と小樽市立朝里中学校（後志管内）の学校運営協議会の様子を見せていただきました。２つの学校運営協議会の委員の皆さんの話し合い（熟議）の内容や委員同士の熟議を経て、取り組まれた実際の活動について紹介します。

【石狩管内】とうべつ学園コミュニティ・スクール委員会

委員による主体的な熟議

とうべつ学園は、令和４年度に開校した義務教育学校で、定例で実施する協議会の他に、委員が自主的に集まって熟議する【SP】委員会を行っているところが特色の１つです。この【SP】委員会では、定例会での議題について具体的に行動するための方策や学校の現在の困りごと、直近で地域と協力したいことをテーマに主体的な熟議を行っています。

集まれる方で構成される【SP】委員会の様子

【SP】委員会を行うことでより深い熟議を実現し、学校の教育活動の充実を図る

学校課題を地域全体で捉えて、課題解決に向けて実際に熟議をしている内容を紹介します。

外国籍の児童生徒の保護者への働きかけについて

協議会で出た話題をさらに熟議する様子

とうべつ学園には約20名の外国籍の児童生徒が在籍しています。学校の中で子ども同士のつながりはありますが、「親同士、特にお母さんたちのつながりがあまりないのではないか」ということが前回の協議会で話題になり、委員の方が意見を出し合いました。

外国籍の住民とのつながりづくりは学校だけではなく「地域課題」でもあるという共通認識をもって熟議を行い、「学校の参観日に、外国籍の保護者が集まる機会をつくる」という意見と、「外国の方との共生について協議会主催でJICAの講演を実施する」という意見が出されました。

「学校課題」と「地域課題」を共有し、双方の課題がよりよい方向にいく熟議を実施

【後志管内】小樽市立朝里中学校学校運営協議会

毎月行われる熟議によって

朝里中学校では、毎月協議会を行っており、毎回の会議には、ほぼ全員（15名）が参加し、右記の表の内容で熟議をしています。また、学校から生徒の状況や学校アンケートの報告を行い、委員全員が学校の状況を把握ができるようにしています。

毎月協議会を実施することで、地域と学校の思いを共有した教育活動が実現できる

②本校の学校運営協議会の取組

【本校の学校運営協議会　年間計画】　協議や熟議を実施

月	主な内容	月	主な内容
4	令和５年度学校経営方針の承認 今年度の活動について	10	校内研究会への参加について 防災訓練について
5	いじめ防止方針の改定について あじさいの植樹について	11	防災訓練の反省について （成果と課題を協議）
6	あじさいの植樹について 防災訓練について	12	朝里中の生徒はどんな生徒に育ってほしいか
7	防災訓練について あじさいの植樹について	1	あじさいドリームプロジェクトについて 学校と地域はどのように繋がればよいか
8	防災訓練について 生徒と地域をつなぐ取組について	2	学校関係者評価について
9	本校の学力・体力について 防災訓練について	3	令和６年度学校経営方針について 次年度の活動に向けて

学校と地域、それぞれの想いを共有させるための取組と共有した結果、生まれた活動を紹介します

生徒の実際の様子や姿を共通理解して熟議するために「校内研修会へ参加」

学校の公開研究会に学校運営協議会の委員が参加して先生方と一緒に授業を参観します。

①生徒の授業中の様子から感じたこと

②委員が考える生徒の理想の姿について

という２つの観点で授業を見て委員同士で協議します。実際の生徒たちの様子を見て、地域住民として中学生にできることを考えます。

←学校運営協議会委員が協議に向けて自分の考えを書き出している様子

学校と地域の思いがマッチングし実現した「朝里中学校防災訓練」

地域の方々と一緒に、校区である朝里地区の防災について考える取組です。町内会やまちづくりの会の方々に学校運営協議会委員になってもらっていることで町内への周知もスムーズで、当日は140名以上が参加しました。また、小学校にも声かけし、小学生の参加もありました。

防災訓練の様子

町内全域に配布された防災訓練の案内

4 子どもの読書活動推進コーナー

社会教育課では、地学協働の推進とともに、子どもの読書活動の推進に関することについても取り組んでいます。今号は、道内の２管内から、学校図書館の好事例を紹介します。

【石狩管内】 読書活動につながる図書館（恵庭市立柏陽中学校）

【「みんなのおすすめ本」のコーナー】

本と出会う機会の工夫

図書委員会は司書教諭の指導を受けて、貸出業務や朝読書の呼びかけを行うほか、図書ボランティア・学校司書と協働して「全校生徒がＴシャツ形の台紙に本の紹介文を書き、廊下に展示する」企画を行っています。また、教職員のおすすめ図書紹介コーナーを設置するなど、柏陽中学校のあらゆる場所に、生徒が本を身近に感じる工夫があります。多読賞（貸出冊数が多い生徒）や記録賞（読書リストの記録冊数が多い生徒）の表彰を行い、生徒が数多くの本と出会い、読書への意欲を高める工夫を推進しています。

読書活動の充実を目指した学校司書の活躍

学校司書の松下さんが、「道みんの日」や職業学習など、季節や学校行事に合ったテーマでの選書を心がけ、表紙が見えるように特別展示を行うなど、生徒が興味をもち、本を手に取りやすい工夫をしています。松下司書は、「中学校３年間で手に取った本の中で、一文でも心に残るものがあれば。」と、選書や展示を進めるほか、朝読書の時間に各教室で新刊の紹介やブックトークを行うなど、活躍しています。

【「いつか働く日のために」と題した展示コーナー】

【十勝管内】「図書館」の力で充実する「児童生徒の学び」（幕別町・鹿追町）

展示コーナーの本には、生徒がPOP（本の紹介カード）を添えています。

図書館は「本を介した交流の場」～幕別町～

幕別町図書館では、町内の小中学校にSDGs等の授業の単元に沿った資料の貸出しを行っています。また、図書館内には、中札内高等養護学校幕別分校の生徒が工夫を凝らした、おすすめ絵本の展示コーナーを設置しています。幅広い層が利用する人気コーナーとなっており、生徒たちが選んだ絵本を地域住民が借りる「本を介した交流の場」として、生徒と社会（地域住民）がつながる機会となっています。生徒が製作した図書館紹介の動画をホームページやAR（拡張現実）を利用してPRする等、ICTを活用した取組も行っています。

授業は「図書館の先生」と一緒に～鹿追町～

鹿追町図書館では、小学１・２年生の児童を対象に、図書館で年に１～２回授業を実施しています。授業は、事前に教員と図書館職員が打合せを行い、普段は読み聞かせ事業のため学校を巡回している図書館職員も、「図書館の先生」として、児童の質問に答えるなどのサポートにあたります。動物が出てくる物語を探してタイトルと作者名を書き留める活動や、公共施設の一つとして訪問した図書館について掲示物にまとめる活動等が行われています。この取組により、来館したことのなかった児童が、図書館や図書館職員を身近に感じることができ、図書館や読書に親しむきっかけとなりました。

掲示物に使用する写真は、タブレットを使って子どもたちが撮影。作品は参観日に発表しました。

題字の背景写真は、「北海道公式観光サイト『ＨＯＫＫＡＩＤＯ ＬＯＶＥ！』」（公益社団法人 北海道観光機構）のフォトライブラリーから御提供いただいております。

● 掲載サイト　https://www.visit-hokkaido.jp/